

Withコロナで変わる 物流のカタチ

コロナ禍における業界の現状とこれから

Withコロナ時代。空を飛ぶ荷物にシートベルト？

コロナ禍が物流に大きなインパクトを与えています。まず、流通が変化しました。スマートフォンやパソコンからショッピングサイトで買い物を済ませられるEC※は、外出自粛の影響でさらに勢いを増しています。2020年4月対前年同月比で、取り扱い個数は110%伸び、GW期間中に120%の伸びを記録する大手ショッピングサイトもありました。

一方、国際輸送は厳しく、特に空運では乗客が減ったことで旅客機の運航が見送られ、貨物スペースを使った輸送が大幅に減少しました。国際輸送が減り、運送各社は貨物専用機の増便だけではなく、旅客機を貨物輸送に転用して対応しています。貨物が客席にシートベルトで固定されて運ばれている報道を目にした方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

※ Electronic Commerce(電子商取引)

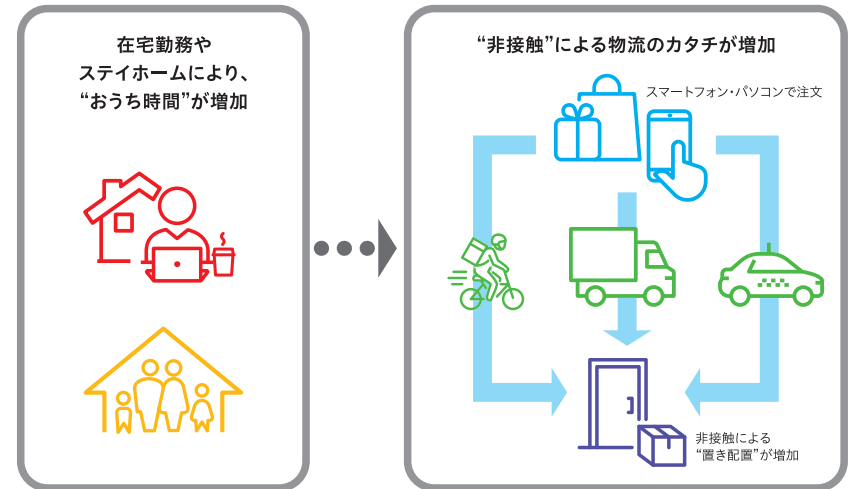


「お届け物は玄関先に置いたまま」がニューノーマル(新常識)

新型コロナウイルス感染予防対策として、「非接触」が重要となります。EC増加の背景には、消費者が出かけずに、店員と接触せずに買い物を済ませられることがあるでしょう。また、受取人の在・不在に関わらず宅配ボックスや自転車のカゴなど、指定された場所や玄関の前に荷物を届ける「置き配」が広がっています。アメリカでは「置き配」が標準の宅配サービスでしたが、日本でも本格的に広まる兆しが見えています。「置き配」は「非接触」に加え、「再配達」というラストワンマイルの課題を

解決する対策としても、今後増えていくでしょう。

物流業界においても、感染予防対策は継続されます。例えば、物流現場の対面点呼でも、マスクやフェースシールドの着用は続けられ、非対面の普及が加速するでしょう。紙で行われていた伝達や記録も、非接触型に進みます。スマートフォンやタブレットなどの電子媒体や紙へのサインも敬遠され、画像で受け取りを確認する新しい方法が開発されるでしょう。



Withコロナ時代に不可欠なのは「社員とその家族、顧客の安心感」

家にこもり、人と接触しない生活が続く中、国交省は特例措置としてタクシーの有償貨物輸送を可能にしました。これまで旅客のみを対象としていたタクシーがレストランの食事を運んでいるのです。また、人が貨物に触れる回数を少なくするために、「自動運転のEV(電気自動車)」や「ドローン」などでの配達がさらに広がります。そして、「自動搬送」や「自動宅配」などを担うロボットの開発も急速に進むでしょう。

社会は大幅に変化していますが、物流は暮らしを支え続けるライフラインとして変わりません。物流を止めないためにも、まずは現場の皆さんが安心して働けることが重要です。そして運送事業者として、徹底した感染予防対策を採り、社員とその家族、顧客に安心感を与えることが不可欠です。Withコロナ時代を歩むためには、まずはそこから始まります。

角井 亮一 (かくいりょういち)

株式会社イー・ロジック 代表取締役社長兼チーフコンサルタント。上智大学経済学部を3年で単位取得終了し、渡米。ゴールデンゲート大学からマーケティング専攻でMBA取得。2000年、株式会社イー・ロジック設立。著書に「アマゾンと物流大戦争」「すごい物流戦略(日本語/ベトナム語)」などアマゾンや物流関連の書籍を多数出版。

